ヤマハカスタムサクソフォン「YAS-875EX」発売20周年記念ガラコンサート

Yamaha CUSTOM SAXOPHONE YAS-875EX 20th GALA CONCERT

いまや国内外の超一流プロ奏者からアマチュア愛好家まで広く愛されるモデルとして知られるヤマハのカスタムアルトサクソフォン「YAS-875EX」。本誌110号の特別企画でも既報の通り、この世界的な名器が2022年に発売から20周年を迎えた。その記念として去る3月には豪華出演陣によるガラコンサートがヤマハホールにて開催された。このスペシャルなイベントの模様をレポートしよう。
（文：鬼木玲子／写真：土居政則／協力：ヤマハ株式会社、株式会社ヤマハミュージックジャパン）

第一部

池上政人（左）と齊藤健太

第二部

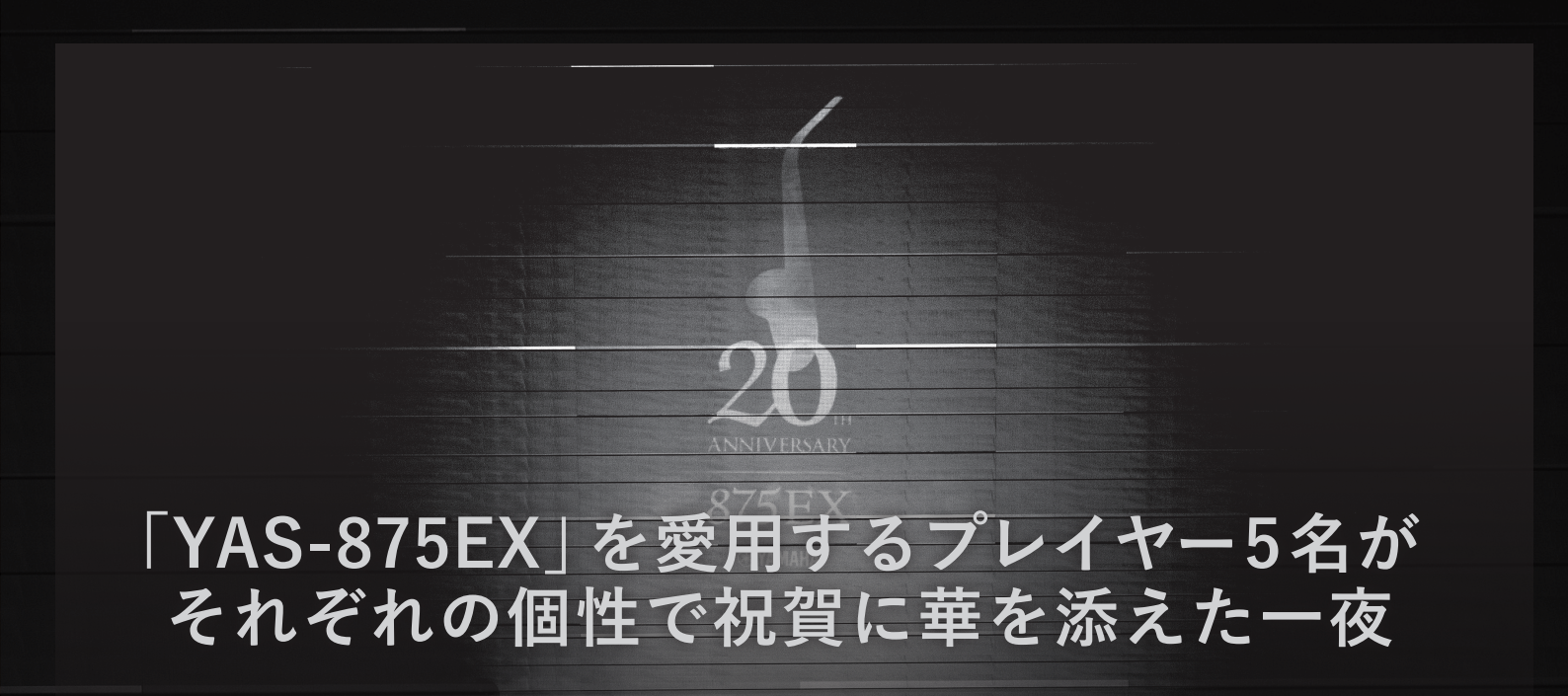
林田和之（左）と田中靖人

第三部

上野耕平（中央）とストリングス

2023.3.25（土）ヤマハホール（東京・銀座）

［出演］齊藤健太／池上政人／田中靖人／林田和之／上野耕平（Sax）、羽石道代（Pf）、高橋愛輝／下宮万弦／大田春菜／中井かりん（Vn）、金田拓真（Vla）、松谷壮一郎（Vc）、桑原孝太朗（Cb）
［曲目］チェイサー （星出尚志）、カンツォネッタ（ガブリエル・ピエルネ：マルセル・ミュール編）、MHP（アンディ・スコット）、チャルダッシュ（ヴィットーリオ・モンティ：栃尾克樹編）、パントマイム（P.スパーク）、モリコーネ・パラダイス（エンニオ・モリコーネ：真島俊夫編）、三重奏曲～ピアノ、オーボエとバスーンのための～ （フランシス・プーランク）、アダージョ ハ長調KV.580a（ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト）、サクソフォン協奏曲（ラーシュ＝エリク・ラーション）



「YAS-875EX」を愛用するプレイヤー5名がそれぞれの個性で祝賀に華を添えた一夜

発売から20周年を迎えたヤマハカスタムサクソフォン「YAS-875EX」。この記念すべき年を祝い、サクソフォン界を牽引するトップ・プレイヤー5名が集結するガラコンサートが開催された。一夜にしてこれだけ贅沢なプログラムを堪能できることは、滅多にない機会である。チケットは完売し、会場となったヤマハホールは、コロナ禍以降初めての超満員となった。

ステージの傍らには、スポットライトを浴びた「YAS-875EX」が置かれた。この楽器に魅了され、愛用しているサクソフォン奏者が、次々と舞台に登場してくる。「CELEBRATION（お祝い）」をテーマに掲げた第1部に現われたのは、池上政人と齊藤健太の師弟コンビ。ピアニストの羽石道代と共に、華やかなコンサートの幕を開けた。冒頭のユニゾンから息ピッタリの2人だが、意外にも今回が初共演だという。池上のアルトがテーマを歌い、齊藤のテナーがそれに続く。お互いを追いかけながらスリリングに展開させた1曲目『チェイサー』の演奏を終えると、がっちりと握手を交わした。その後、齊藤が楽器をアルトに持ち替えてソロ演奏へ。“サクソフォンの神様”マルセル・ミュールの編曲作品『カンツォネッタ』では、芳醇な音色で心地よいメロディを綴る。一方、サクソフォン奏者としても活躍している作曲家アンディ・スコットの『MHP』では、叫びにも似た勢いのある音で印象をガラリと変えた。対照的な2曲の魅力を存分に披露した齊藤は、「講評をいただきたい！」と再び池上をステージに招き入れた。「音に芯が出てきた」と師匠から評されると、齊藤は「やっとリラックスできました」とホッとした表情に。今度はバリトンサクソフォンに持ち替え、唸る低音で『チャルダッシュ』をスタート。そこへ、池上のアルトが切ない音色を重ねていく。スピード感が増していく箇所では、軽やかさがありながらも、細かなパッセージの一音一音がすべて豊かに響き渡り、聴衆を圧倒していった。

休憩を挟み、今度は林田和之がテナーを伴って登場し、朗々と深い音色でソロ曲『パントマイム』を披露した。演奏を終えると、早々に「みなさん、お待ちかねですよね！」と田中靖人を舞台に呼び込み、第2部のテーマ「THE WAY（道のり）」について説明した。今回の公演で、林田が使用しているサクソフォンは「875EX」の前身である「875」であること、875EXの開発に携わっていた須川展也氏が試作中の楽器を吹いていた時の思い出、また、源流ともいえる「855」を所有していた話など、楽器開発の歩みに関連した楽しいトークが続いた。このテーマに沿って、「人生の流れを感じるものを」と田中がソロ演奏に選んだのは、『モリコーネ・パラダイス』。輝かしく張りのある音色を聴かせたのち、映画「ニュー・シネマ・パラダイス」の『愛のテーマ』では、ほとばしる思いを抑えながら優しくメロディを綴った。お互いのソロ演奏後は、羽石のピアノと共にトリオを披露。林田のソプラノと田中のバリトンによる音の高低差が、なんとも心地よい。2人の発音の美しさ、ハーモニーの正確さ、完璧にそろった息づかいに、第1楽章が終わった時点で聴衆が思わず拍手する場面も。演奏者が3人とは思えないほど奥行きのある音色が会場を満たし、アンサンブルの魅力が存分に伝わる演奏となった。

第3部のテーマは、「MASTERPIECE COLLECTION（名作コレクションfeat.YAS-875EXG）」。上野耕平が、ストリングスと共に登場した。1曲目のモーツァルトは、弦楽器の伸びやかな音に、サクソフォンの透き通るような、それでいて濃密な音色がマッチ。最後の余韻まで、じっくりと味わいたくなる音楽が披露された。演奏を終えると、上野は舞台に置かれた「YAS-875EX」に向かって「おめでとうございます！」と語りかけ、「望みうる最高の楽器」と称賛を贈った。「今日のコンサートで、みなさんもこの素晴らしい音を肌で感じているのでは？」と問いかけられた聴衆も、大きな拍手で応える。そして、プログラムの最後を飾ったラーション『サクソフォン協奏曲』は、指揮者なしで披露。この楽曲を新たな演奏形態で演奏することは、上野にとっても挑戦だ。しかし、いとも簡単にそれを乗り越えていく。自分が表現したいことを、アンサンブルメンバーに演奏で明確に伝え、音楽を作り上げる。第2楽章では、ストリングスが静かな海のように奏でる中、サクソフォンの音色が一筋の光のごとく現われ、得も言われぬ美しさに包まれた。

アンコールは、もちろん出演者5名が舞台にそろい、豪華なアンサンブルが披露された。曲目は、福井健太氏編曲によるスペシャルバージョンの『星に願いを』。それぞれの個性が際立ちながらも、不思議とひとつにまとまっていく音楽に驚愕した。聴衆の多くが前のめりになり、心地よいスウィングに身を任せている姿が印象的だった。充実したコンサートの幕が降りた後、会場全体が興奮冷めやらぬといった雰囲気で余韻に浸っている中で、舞台上の「YAS-875EX」が誇らしげに、ひときわ美しく輝いたように見えた。